船場御坊の四百年

―新発見！本徳寺の歴史と名宝―

姫路船場別院本徳寺宗祖親鸞聖人
七百五十回御遠忌法要に向けて

姫路船場別院本徳寺（真宗大谷派）
NPO法人歴史と出会えるまちづくり船場城西の会
《協力　同朋大学仏教文化研究所》

はじめに

船場本徳寺は、「船場御坊」の名前で地域に親しまれているが、現在の正式名称は「真宗大谷派姫路船場別院本徳寺」という。真宗大谷派は、いわゆる東本願寺（正式名称「真宗本廟」）を本山とする宗派で、本尊は阿弥陀如来、宗祖は親鸞（一一七二～一二六二）である。

親鸞は、鎌倉時代に師法然から専修念仏の教えを聞き、その教えを深め、「浄土真宗」を確立させた。親鸞の没後、その墓所がやがて本願寺となり、戦国時代には蓮如（一四一五～一四九九）が現れ、浄土真宗の教えを多くの人びとにひろめ、本願寺を中心とする教団をつくり上げた。

本徳寺のはじまりは、蓮如がその晩年、空善をはじめとする弟子たちを播磨に派遣したことによる。空善らは英賀の浦に道場を建立し、布教した。この道場が二代実玄、三代実円のころには本徳寺と称し、本願寺の御坊寺院として播磨教団の中核となった（実円とその孫証専は本徳寺と三河土呂本宗寺を兼帯し、本願寺教団の重鎮であった）。本徳寺は天正年間に豊臣秀吉の播磨攻めにより攻撃を受け、その後、秀吉により英賀から亀山に移転させられた。

慶長年間に本願寺が東西に分派した際、亀山本徳寺ははじめ東派に属したが、後に東本願寺教如（一五五八～一六一四）と姫路藩主池田輝政との間に確執が生じ、西派に転じた。その後、池田家が没落し、かわって姫路藩主となった本多忠政が元和四年（一六一八）に船場の寺地を東本願寺宣如（?～一六五八）に寄進し、教珍が住職として入寺した。ここに船場御坊本徳寺が成立し、四百年の歴史を刻み始める。

第一部　本徳寺の歴史

船場本徳寺は江戸時代以降、東本願寺の御坊寺院であったが、そのなかでも本山歴代の連枝（子弟・親族）が入寺し、住職となる別格寺院であった。本徳寺には多くの由緒・記録・文書・日記・聖教・図面などの史料群、また住職歴代やその家族の人びとを描いた影像類などが残っている。

船場本徳寺のおよそ四百年にわたる歴史は、本山東本願寺や姫路藩権力との密接な関係、歴代の事績、本堂・境内等の変遷など、注目すべき点が多い。貴重な史料の数々から、その一端をうかがってみたい。

本徳寺の由緒

1　本徳寺略譜

一冊　縦二〇・五㎝×横一三・三㎝
江戸時代

船場本徳寺の開基蓮如から十三代真高までの歴代とその妻子を系図で示し、各人の事績を簡潔にまとめた記録。冒頭には「本徳寺歴世」として二代実玄から十二代乗証までの歴代夫妻を掲げる。簡潔な記載ではあるが、江戸時代中期までの船場本徳寺の歴代関係者の事績を知る上でたいへん重要な史料である。

2　本徳寺譜

一冊　縦二四・五㎝×横一八・三㎝
明治時代

本書は①「本徳寺系譜捷覧」、②「本徳寺分脈系譜」巻一（後欠）から成る。①は本願寺・東本願寺の歴代も併せて記した、船場本徳寺歴代の系図。②は船場本徳寺の開基蓮如から六代宣純までの系譜を列記し、そこで筆が途絶している。②冒頭の目録によれば、巻二に亀山本徳寺、巻三は南来寺、真楽寺、称名寺・光徳寺の系譜とあるが、巻二・巻三は所在不明である。

3　船場御坊古今集記

一冊　縦二七・一㎝×横二〇・〇㎝
明治時代写（江戸時代中期編纂）

船場本徳寺の歴史をまとめた記録の写し。冒頭の目次からもとは上・中・下の三巻構成と知られ、寺史に加えて周辺の歴史的事跡まで多く記載があり貴重な内容である。しかし、この写本は中巻までしかなく、下巻の欠如が惜しまれる。本文中に十一代真証までが記載されるので、もとの編纂時期が推定できる。大谷勝珍（十七代厳継）の蔵書印がある。

4　本徳寺沿革一覧図

一枚　縦一五〇・五㎝×横一五・五㎝
明治時代

写真裏紙左

船場本徳寺の沿革を一覧図としたもの。明応年間（一四九二～一五〇一）英賀（現・姫路市飾磨区英賀）での創建に始まり、天正十年（一五八二）の亀山（現・姫路市亀山）移転や元和三年（一六一七）の船場再興といった、当寺の歴史をめぐる重要な項目について、明治十八年（一八八五）の明治天皇行幸まで記されている。

5　船場御坊御再建等記録

一綴　縦二四・七㎝×横一七・五㎝
明治時代写

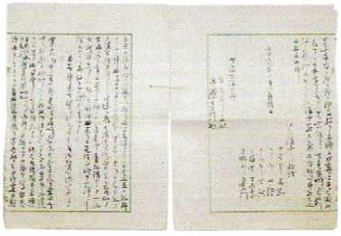
「船場管刹」と記された罫紙三枚に、①「船場御坊御再建并宣如上人御下向御遷仏ノ事」と②「寺内町寄附之事」という船場本徳寺の開創に関する二つの歴史的出来事が書き付けられている。①の内容は本多忠政の寺地寄進と元和四年（一六一八）の本

徳寺再建（船場開創）と遷仏式、②は慶安三年（一六五〇）の松平忠次による寺内町寄進である。

6 貞照院殿御帰参興起之事

一綴　縦二八・三㎝×横二〇・二㎝
明治時代写

「大谷古龍蔵」と記された罫紙六枚に「貞照院殿御帰参興起之事」以下全七段にわたり、亀山本徳寺から貞照院良春尼が出て、船場本徳寺に移る一件の詳細が書き付けられている。貞照院良春と西本願寺との間には寺号本尊の免許権をめぐる確執があったようで、それに東西分派の混乱が絡んだ事件とみられる。



7 徳川忠長書状

一通　縦四〇・八㎝×横五六・三㎝
江戸時代・年未詳二月二十日

徳川忠長（一六〇六～一六三三）が東本願寺に対し、歳暮として小袖を二枚送った際の添え状。忠長は江戸幕府二代将軍徳川秀忠の第三子で、母は浅井長政三女の江。この書状が船場本徳寺に伝来する経緯は不明だが、忠長が「駿河中納言」と称したのは寛永元～三年（一六二四～六）と考えられ、その時期の発給と推定される。

8 京極高和書状

一通　縦三七・〇㎝×横五三・〇㎝
江戸時代・年未詳五月三日

京極高和（一六一九～一六六二）が船場本徳寺へ使者にて申し入れたことに対して、本徳寺の家来と考えられる岡七郎兵衛が御礼を申し述べに来たことに対する礼状。京極高和は寛永十四年（一六三七）から万治元年（一六五八）にかけて播磨国龍野藩主で、その息女は船場本徳寺六代宣純の室と伝えられる。

9 播州姫路歴代城主

一冊　縦二四・五㎝×横一七・二㎝
元禄十一年（一六九八）

播磨国姫路の歴代城主について、南北朝時代に最初の城主となった赤松則村（一二七七～一三五〇）から、江戸時代の天和二年（一六八二）に入部した本多政武までを記載したもの。奥書によれば、元禄十一年（一六九八）古老の覚え書きをもとに、船場本徳寺下である法雲寺（現・龍野市龍野町大手）八代住職の隆暁がまとめた。

10 親鸞影像・同裏書〔特別出陳〕

一幅　縦一一一・一㎝×横四七・三㎝
戦国時代・明応五年（一四九六）

浄土真宗の宗祖親鸞を描いた一幅（現額装）。裏書（現別装一軸・縦六八・五㎝×横三一・五㎝）から、播磨に下向した空善に対して「播磨国飾西郡英賀東常住物」として明応五年（一四九六）本願寺実如が下付したものと知られる。また、天文十四年（一五四五）本願寺証如の修復裏書（縦六八・五㎝×横二二・一㎝）も添えられ、実円の所望による修復と明記される。もと英賀本徳寺伝来の親鸞影像とみられるが、現在の所蔵は名古屋市養念寺である。

本徳寺の系譜

11 蓮如木像

一躯　像高三八・〇㎝×膝張四九・〇㎝
昭和七年（一九三二）

写真 表紙中央上

本徳寺の開基に位置付けられる本願寺蓮如の木造坐像。中振りのつくりであるが、像高に対して膝張が広く、玉眼も嵌入されており、堂々とした印象を受ける。胎内銘により、昭和七年（一九三二）の製作と知られる。

12 顕浄院釈教珍（寿継）影像

一幅　縦一〇二・〇㎝×横四二・九㎝
江戸時代・明暦二年（一六五七）没

純色（にびいろ）系の向鶴丸紋の裘代（裘帯）をまとい、紫色同紋の五条袈裟を着けて、右手に桧扇、左手に念珠を持つ。教珍は本徳寺五代（船場本徳寺初代）。元和四年（一六一八）本多忠政の寺地寄進を受け、宣如の命により船場本徳寺の住職となる。大和国本善寺顕珍（佐継）の息男で、宣如の姉（教妙）を内室とする。

13 釈尼教妙影像

一幅　縦九五・四㎝×横二八・三㎝
江戸時代・寛永三年（一六二六）没

白小袖の内掛に淡い水浅黄色の頭巾を着用し、右手に念珠を持つ。教妙は本願寺十二代（東本願寺初代）教如の息女で宣如の姉。元和六年（一六二〇）播州に下り、船場本徳寺を別立してまもない教珍の内室となる。船場本徳寺は当初から東本願寺近親の御坊としての位置を有したのである。なお、本幅には宣如の裏書があり、教妙の命日が記される。

14 浄澤院釈宣純（従継）影像

一幅　縦九九・〇㎝×横四一・四㎝
江戸時代・寛文三年（一六六三）没

純色（にびいろ）系の向鶴丸紋の裘代（裘帯）をまとい、薄紅色同紋の五条袈裟を着けて、右手に桧扇、左手に念珠を持つ。宣純（または宣澄）は教珍の息男で本徳寺六代。『本徳寺略譜』等によれば、内室は播磨国龍野藩主京極刑部少輔（高和）息女という。

15 貞照院釈尼良春影像

一幅　縦九九・一㎝×横四四・二㎝
江戸時代・元禄十四年（一七〇一）没

黒色系の直綴をまとい、白色の頭巾を着用し、右手に念珠を持つ。良春はもと亀山本徳寺六代准円（昭澄）の内室であったが、木山西本願寺との確執があり、寛文年間に東派転派寺院が協力し船場本徳寺に迎えた（七代琢玄と仮の母子関係を結ぶ）。この際に良春が「夏の御文」を持参し、以後拝読されるようになったという。

16 演慈院釈琢玄（瑛白）影像

一幅　縦九九・一㎝×横四二・二㎝
江戸時代・宝永六年（一七〇九）没

白色（八藤紋地）の裘代（裘帯）をまとい、紅色同紋の五条袈裟を着し、右手に桧扇、左手に念珠を持つ。琢玄は東本願寺十四代琢如の息男で、母は船場本徳寺五代教珍息女。寛文三年（一六六三）船場本徳寺に入寺（七代）。天和三年（一六八三）越前本瑞寺を兼住し、最後は越前で没した。

17 聞光院釈一玄（海澄）影像

一幅　縦九九・四㎝×横四二・二㎝
江戸時代・享保十三年（一七二八）没

白色（八藤紋地）の裘代（裘帯）をまとい、紅色同紋の五条袈裟を着し、右手に桧扇、左手に念珠を持つ。一玄は東本願寺十六代一如の息男で、貞享四年（一六八七）船場本徳寺に入寺（八代）。後に越中善徳寺を兼住。本徳寺本堂再建のため、勧進活動を行い、享保三年（一七一八）再建本堂が落慶する。同八年に隠居し載萌閣と号した。なお、御山廟所も一玄が姫路城主榊原政邦から土地寄進を受け、宝永八年（一七一〇）に建設した。

18 誓好院釈尼敬証影像

一幅　縦九九・二㎝×横四二・二㎝
江戸時代・安永四年（一七七五）没

白色の小袖に地模様のある黒系の直綴をまとい、淡い水浅黄色系の頭巾を着用し、右手に念珠を持つ。敬証は十代恩重院釈真澄の内室で長浜大通寺より入嫁。九代欣浄院真純、十代真澄（両者とも一玄息男）が相次いで没したため、敬証が船場本徳寺十一代となった。

19 真香院釈達威禅尼影像

一幅　縦九八・七㎝×横四二・一㎝
明治三十七年（一九〇四）没

地模様のある黒系の直綴をまとい、袈裟を着け、苗色（薄萌黄色）の頭巾を着用し右手に念珠を持つ。達威（大谷達子）は東本願寺二〇代達如の息女で、船場本徳寺一五代超勝院達相の内室となるが、達相が安政六年（一八五九）に没したため、その跡を継ぐ。

20 顕明院釈厳継影像

一幅　縦九九・五㎝×横四二・二㎝
大正十三年（一九二四）没

白色（八藤紋地）の裘代（裘帯）をまとい、紅色同紋の五条袈裟を着し、右手に桧扇、左手に念珠を持つ。厳継（大谷勝珍）は達相と達威の子で船場本徳寺十七代。明治十八年（一八八五）明治天皇の行幸があり、大正五年（一九一六）私立船場幼稚園を開設した。

本徳寺の記録・聖教・図画

21 琢如上人十三回忌御法事記

一冊　縦二八・三㎝×横二〇・四㎝
三五八×二七五

天和三年（一六八三）三月八日から十四日にかけて東本願寺において執り行われた、前住琢如（一六二五～一六七一）の十三回忌法事の記録。船場本徳寺七代演慈院琢玄は琢如の息男であるため、東本願寺十五代常如の次に読経の調声役を担当している。法事は全国から一二〇〇人以上の末寺僧が参集する大規模なものであった。

22 御堂日記

六二冊　縦三四・三㎝×横一三・五㎝
元禄二年（一八六九）～明治三十年（一八九七）

船場本徳寺には現存一三四冊の日記類の所蔵が確認される。そのうち、本堂における毎日の勤行・儀式の次第や、御坊御堂衆の役当番などを記した『御堂日記』がもっとも多く、六二冊が現存する。元禄二年（一六八九）の『御堂日記』がもっとも古い。御坊における儀式の歴史を知る上で貴重な史料群である。（展示ではこのうち数冊を出陳）

23 亀麿様御誕生留

一冊　縦二三・一㎝×横一六・一㎝
嘉永七年（一八五四）

後に船場本徳寺十七代となった亀麿（大谷勝珍）が嘉永七年（一八五四）正月三日に誕生した際の留書。誕生前年の九月二十三日に行われた着帯の儀式より記載が始まる。祝儀として受け取った品や祝儀に際する膳の献立などについても記されており、出産をめぐる文化を知る上でも重要な史料である。

24 顕明院様御在京御日記

一冊　縦二二・八㎝×横一五・七㎝
文久四年（一八六四）

船場本徳寺十七代顕明院厳継（大谷勝珍）が、文久四年（一八六四）に在京した際の日記。京都到着の四月二十六日から出立の八月十四日までの記事があり、在京中の交流・贈答関係の記載が多い。なお、翌慶応元年（一八六五）の『御在京中仮日記』と合冊されており、同日記の表紙の記載から、文久四年が厳継の得度後初の上京と知られる。

25 懇志礼状

一通　縦一八・〇㎝×横四九・〇㎝
元禄二年（一六八九）十一月二十八日

播州飾東郡姫路本徳寺十日女房講中にあて、元禄二年（一六八九）十一月二十八日、東本願寺家臣の八木采女（重継）と七里道専（重正）が発給した文書。同講中が東本願寺に対して、懇志として白銀一枚を上納したことに対する礼状である。江戸時代中期の船場本徳寺における講活動の一端がうかがえる。

26 親鸞伝書上

一冊　縦二七・七㎝×横一九・七㎝
寛保三年（一七四三）五月写

浄土真宗の宗祖親鸞の伝記について、慶長十五年（一六一〇）に駿府大御所徳川家康が使者をもって東本願寺に尋ね、粟津勝兵衛が清書して示したとの記載がある。摂津国天満本泉寺六世宣恵による草案を播磨国印南郡佐土村（現・姫路市別所町佐土）の福乗寺六世恵順が書写し、その後も書写が繰り返されて船場本徳寺にもたらされたものとみられる。

27 御俗姓（勝珍謹写）

一通　縦一六・七㎝×横八五・六㎝
年代不詳（幕末～近代）

「御俗姓」は文明九年（一四七七）十一月初頭にあらわされた蓮如の御文である。親鸞の出自・行実を述べ、その正忌である十一月二十八日の報恩講を営む上での門徒の心得を記している。この一通は船場本徳寺十七代大谷勝珍（一八五四～一九二四）が書写したもの。儀式で拝読したものであろうか。

28 御末寺配下控

一冊　縦二四・四㎝×横一七・三㎝
江戸時代

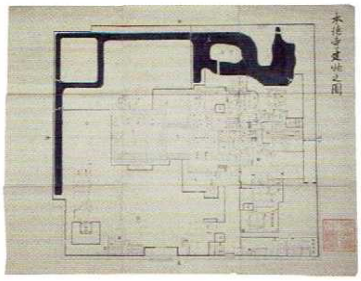
船場本徳寺の配下にある末寺を書き上げたものの控えである。本徳寺下が五十六か寺、東本願寺の直参寺院が七十三か寺、赤

穂御坊妙慶寺（現・赤穂市加里屋）付が五か寺、万福寺（現・赤穂市加里屋）下が十一か寺の計一四五か寺が記載されている。配下寺院の領域は、播磨国の大部分である十五郡（多可郡以外）と但馬国朝来郡に及ぶ。

29 本徳寺建物之図

一枚　縦五二・七㎝×横六八・一㎝
年代不詳（幕末～近代）

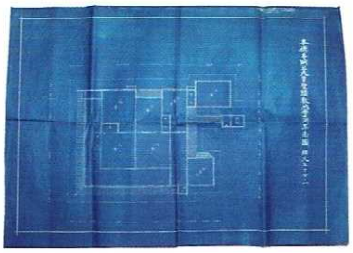
船場本徳寺の建物に関する平面図である。右下に「本徳寺住職印」という印文の朱方印が捺印されている。境内の全容と建物の配置、内訳の詳細が記されており、貴重な図面である。北西に、後に明治天皇の行在所となる書院（新殿）が描かれているので、書院造営の安政年間（一八五四～六〇）以降、明治十八年（一八八五）以前の図面であろう。



30 明治天皇行在所実測平面図

一枚　縦五四・七㎝×横七八・六㎝
明治十八年（一八八五）

明治十八年（一八八五）八月八～九日、船場別院本徳寺へ明治天皇が行幸した際に滞在した行在所の実測平面図。縮尺が五十分の一の青写真である。なお、この行在所は昭和七年（一九三二）の火災で一部焼損するなどしたが、修復され、平成二十三年（二〇一一）六月四日、曳家工事で南西に移動され、文化財としての修復・保存が進められている。



第二部　本徳寺の名宝

船場本徳寺は東本願寺歴代の兄弟や近親親族が住職をつとめる別格的な御坊寺院であったため、住職歴代が用いた格式の高い特別な法衣・装束、本堂で用いる打敷・法具、趣深い調度品などが多く所蔵されている。

また、多くの文化人・知識人が本徳寺を拠点としてさまざまな活動をしていたとみられ、所蔵される文物・絵画などにも興味深いものがある。地域の文化的拠点としての性格にも、あらためて注目してみたい。

法衣・装束・打敷

31 色素絹

一領　丈二〇八・六㎝×幅一七九・一㎝
江戸時代

着用写真
表紙左上

元来「素絹」は練らない白の生糸でつくった長丈の法衣であるが、後に色ものも見られるようになり、「色素絹」と通称される。本品は夏用とみられ、橙色の沙糸の材質で、牡丹紋の地模様がみられる。本品を包んだ畳紙の記載によれば、船場本徳寺八代聞光院一玄が依用したものである。

32 五條袈裟

一領　縦五七・一㎝×幅一四六・八㎝
江戸時代

着用写真
表紙左上

袈裟とは僧侶が身にまとう法衣の一種で、さまざまなかたちがあるが、縦布を五枚（条）、横に繋ぎ合わせてつくったものを五条袈裟という。本品は萌黄地に金唐井筒文様と、立牡丹紋と向鶴紋（金・白緑金）を交互に入り交ぜた図柄であるが、東本願寺系では用いない居並紋になっており特殊である。畳紙の記載によれば、聞光院一玄の依用である。

33 七条袈裟・横被

一領一肩　縦一一〇・〇㎝×横二二五・四㎝
縦一七二・〇㎝×三四・〇㎝
江戸時代・安永二年（一七七三）

紅地に金籠目模様と、牡丹と二羽鳳凰を入り交ぜた図柄（織）の優美な七条袈裟である。横被は七条以上の袈裟を着用する場合に右肩にかける別の布。畳紙によれば、安永二年（一七七三）東本願寺新門応如が用いたもので、同五年に早世した後の形見の一品か。応如は一時、船場本徳寺入寺が約束されていた。

34 袍裳

一領一腰　縦八四・五㎝　縦一五八・五㎝
江戸時代・天保十三年（一八四二）

袍裳とは僧侶が身にまとう法衣の一種で、上下に分かれ上衣を袍、下衣を裳という。畳紙から、本品は、もとは江戸時代後期の調製で、明治二十年（一八八七）摂光院（大谷勝尊・八尾大信寺）から譲り受け、あつらえ直したと知られる。大谷勝尊の息

男榮心が船場本徳寺に入り顕明院厳継（大谷勝珍）の跡を継いだ関係であろう。渋茶色系地に紗綾型地模様と八藤紋を配した図柄で、能装束を思わせる雰囲気がある。

35 半尻

一着　丈九九・六㎝×行一四一・六㎝
江戸時代・万延二年（一八六一）三月

半尻とは童形用の狩衣の一種。東本願寺で行われた「大御遠忌」（親鸞六百回忌）の上童役をつとめた亀丸（後の厳継・大谷勝珍）が拝領したものであり、紅梅色小葵地紋に白鳳凰丸浮紋を配した鮮やかな仕立てである。

36 打敷（萌黄地抱牡丹八藤）

一枚　縦二七五㎝×幅三五八㎝
寛政十年（一七九八）二月二十五日

打敷とは寺院本堂の内陣・余間や内仏などにおいて、卓を荘厳する法具の一種。本品は蓮如三百回忌法要に際して寛政十年（一七九八）二月二十五日に船場本徳寺の「廿五日御報謝講中」が寄進したもので、萌黄地に抱牡丹紋と八藤紋を羅列した図柄である。当寺に現存する打敷類で年代のわかるもっとも古いものである。

37 打敷（紅縮緬菊花）

一枚　縦二六〇㎝×幅三四二㎝
明治二十三年（一八九〇）五月

明治十八年（一八八五）に船場別院本徳寺へ行幸した明治天皇より下賜された紅縮緬を、明治二十三年（一八九〇）五月に蓮如諡号供養会を執り行った際、菊花を刺繍して仕立てた打敷。播磨国神東郡砥堀村（現・兵庫県姫路市砥堀）の藤田利吉が、彩繍料として金三十六円を寄進した。

写真表紙中央下

調度品

38 姫路革黒御紋附文箱

一点　江戸時代～近代

播州姫路地域の伝統的な革製の黒色文箱。甲蓋表に二つの播州牡丹紋（本徳寺牡丹）を付し、表向にも使用されたものであろう。なお、播州牡丹紋は、東本願寺二十代達如の息女達子（達威尼）が船場本徳寺一五代達相に輿入れした際に下されたものである。

39 姫路革朱色小物入

一点　江戸時代～近代

播州姫路地域の伝統的な革製でベルト付の朱色小物入。甲蓋表に播州牡丹紋（本徳寺牡丹紋）を付す。女性が和装の正装をするときに用いる「筥迫」の類と思われ、本徳寺一族の女性が使用したものであろう。

40 姫路革唐獅子牡丹之図文箱

一点　寛政十年（一七九八）

播州姫路地域の伝統的な革製で、朱塗を地に金色で岩上の獅子と牡丹を描く。船場本徳寺十六代真香院達威尼の遺品と伝えられる。

41 鶴亀蒔絵香炉盤

一点　江戸時代～近代

雲に鶴、波間に亀を描く金蒔絵の香炉盤で、本堂用の法具ではなく、座敷の床に使用されたものと考えられる。

42 黒漆塗播州牡丹紋入蒔絵火鉢

一点　江戸時代～近代

四つの描足を持つ御殿火鉢で、黒漆塗に金の平蒔絵で播州牡丹紋を配す。四隅に唐草文の金銅製金具を打ち、風格のある火鉢である。

43 黒漆塗菊蒔絵煙草盆

一点　江戸時代・文久四年（一八六四）

銀製把手の付いた箱型の煙草盆で、下部に三つの引出を設ける。黒塗地に菊に竹が金蒔絵で配されており、銀製の火入と莨入を付す。文久四年（一八六四）徳川十四代将軍家茂が東本願寺を訪れた際に東本願寺第二十代達如（当時は隠居）が拝領したもので、後に達如の形見として慶応二年（一八六六）に船場本徳寺にもたらされた。

文化的書画

44 朗眼詠歌

一幅　縦二二・九㎝×横三六・〇㎝

朗眼は船場本徳寺一五代超勝院達相。船場本徳寺の仏法興隆を詠んだ内容である。

45 タンカ

一幅　縦六八・三㎝×横四一・七㎝

タンカとはチベット仏教における掛軸仏画の総称である。絹の下地に着色した布を縫いつけるような製作方法が多い。本品は日本人として三番目にチベットに入った寺本婉雅（東本願寺の学僧）が勝（摂）光院（大谷勝尊・八尾大信寺）に贈ったもの。勝尊息男榮心が船場本徳寺に入寺した際の持参物か。

46 日暮之図

一幅　縦六〇・四㎝×横六五・〇㎝

富岡鉄斎（一八三七―一九二四）の作と伝えられる絵画。鉄斎は「日本最後の文人」とうたわれる有名な画家で、その作品は数多い。本紙右下に「鐵齋外史（朱印）」とあり、軸裏に「鉄斎ヒノケ」と記される。「ヒノケ」は「日の異」すなわち日暮の意か。

47 黄菊之図

一幅　縦一三二・〇㎝×横五九・四㎝

本紙右下に「草山生正身写（朱印）（朱印）」とある。作者の高橋草山は嘉永五年（一八五二）播磨の生まれで明治期に活躍した画家。船場本徳寺には他にも多く草山の絵画が残る。大谷勝珍との交流があったのであろうか。

48 瀑布之図

一幅　縦一〇六・五㎝×横三五・三㎝

本紙左下に「秋華写（朱印）」、木箱上書に「瀑布之図 高橋秋華筆」とある。作者の高橋秋華は明治十八年（一八七八）岡山県の生まれで大正・昭和期に活躍した画家。本品は大谷勝珍が娘玉梅に形見として残した一幅。

49 楊柳観音之図

一幅　縦一二五・〇㎝×横三四・五㎝

楊柳観音とは三十二観音の一で、しばしば仏画の題材にされる。右下に「風月庵玉海（朱印）」とある。作者の大谷玉梅は大谷勝珍の娘で絵を能くした。船場本徳寺には他にも玉梅の絵画が残る。

50 襖（行在所使用）

二枚　縦一七三・〇㎝×横一四四・七㎝

明治天皇が明治十八年（一八八五）八月八日に船場本徳寺に逗留した際に使用した建物（行在所）の襖。建物はもともと安政年間に書院として建築され、昭和七年（一九三二）火事で一部焼損し修復している。襖そのものの製作年代、作者は不明であるが、気品のある大きな襖である。

・本図録は、特別企画展「船場御坊の四百年―新発見！本徳寺の歴史と名宝―」の開催にあたり、作成したものである。

会期　二〇一一年九月六日(火)～十一日(日)
会場　イーグレ姫路B1特別展示室
主催　姫路船場別院本徳寺（真宗大谷派）
　　NPO法人歴史と出会えるまちづくり船場城西の会
後援　姫路市・姫路市教育委員会・
　　(財)姫路市文化国際交流財団
協力　同朋大学仏教文化研究所（愛知県名古屋市）・大谷大学（京都府京都市）
　　合同調査チーム
特別協力　小栗栖健治（兵庫県立歴史博物館）
　　養念寺（愛知県名古屋市）

・本図録作成に関する各作業担当者は次のとおりである。

編集統括　安藤弥
解説執筆　青木馨　安藤弥　松金直美
デザイン　川端正吾　川端絢
・印刷　双光エシックス株式会社
・発行日　二〇一一年九月六日